

『忘れな草』

中学校に通う道。

転校してから間もない私は、いまだに通学路に自信が持てない。新しい学校へと続く道は似たようなお家お家、またお家。住宅街だから仕方ないのだが、慣れ親しむまではきつと自分の位置も分からずに迷うほど変わり映えしない風景がつまらなく続く。

天候にもよる。晴れて視界が良好だとまだいいのだが、曇ったり雨が降ったりしているとき気分が滅入るせいか、焦る。方向音痴のワタシは未だに慣れない。もしこのまま迷宮入りしてしまえば、ワタシは孤独と戦わなければならなくなる。そう、ゲームの主人公、お姫様をさらった怪物を追う勇者の気分になり焦燥感と不安に襲われるのだ。

ワタシと同じみうじゅんはさつと歩いて、学校までの道を少しでも伸ばそうと牛歩作戦をしているであろう制服姿を見かけてホッとした。そして、いい匂いがしてきて鼻をひくひくはなはな。いままに近づければもう安心。黒っぽい屋根が多い中でひときわ目立つ赤い三角屋根お宅の角を曲がるとパン屋とながめっつ、

今の学校に通う事が決まってからずっと気になっていた。

風の噂にやると、じつはちョロチップのベーグルが美味らしいこと。

そこからじつはく歩くと、地域のボランティアの方々が丹精込めて育てているのであろう可愛い花壇の小道がある。季節のお花が季節に合わせていつの間にか植えられていて、正しい学名のわからないはじめましての花と出会えることができる。その小道は勇者がお姫様と再会するお城の庭を彷彿とさせ、ルールまでもう目前と呼吸を整える。そしてこの辺で忘れ物や意地の悪い言葉をかけてきたような元気な同級生のことをふと思ひ出す、コロロがむむむ。

転校してきて一か月。たぐさまでなくてもいいけれど、一人一人の友達はできるのだろうか。人気者になることは思わなければ、クラスに上手に溶け込んで波風立つことなく卒業までの日々を穏便に過ごすことができればいいか。

学校まではあと五分。小道の終わりの、指を天に向けて笑っている子供のオブリエの下の方に目が動いた。何やら紙のやうなものが置いてある。

それが二つに畳まれたメモ帳の切れ端だということ  
が分かった。その間には、小さな葉っぱがひょっこり  
顔をのぞかせている。

普段なら気にならないし、誰のものとも知れないもの  
を触るのは避けるけれど、今日はなんだかやけに気が  
なったのでそーっと手に取ってみた。

「このはびきを あたまにのすると、へんじでできず

」なんじゃいね」

思ったよりも大きな声で口に出していたように、後  
ろを走っていた同じ中学校の多分学年が下の子に怪  
訝な顔をされた。ひらがなだけのおかしな文字に面食  
らうとも、特段面白くもならぬと思ふその紙をせま  
い場所に戻した。

羽口。

今日はこつこつと羽が怪しい。

なんだか口口口口で逆気さぽくなら憂鬱になるのは  
なぜだろう。頭から足の先まで水浸しになって汗汗汗  
くなる。そくて気分がガタ落ちになる。生理も近こつ  
なおいらいだ。

そう言えば昨日は話したことのない子と少し話  
が  
できた。

通称そよ風さん。

どっしてワタシがそう名付けたかというのと、爽やか  
で人を選ばず、何事にもわだかまりが無さそうだから。

「体育館、南棟の横だよ」

「ありがうひ」

「よければ一緒に行かならう」

「ううん」

これらの会話。そよ風さんの友達は少し嫌な顔をし  
ていた。多分二人だけで話したい話があるのだらう。  
咄嗟に気づいたけれど、でもそんなことワタシは知り  
ない。だから「口を無に閉じて歩き出した。

ワタシは、

「木だよ、ワタシはただの木だから気にしないでね」  
とんでもないワタシに体育館までの道のりを無言で過  
した。そよ風さんと友達が楽しそうに話をうつつの  
を、気づかれない程度に頷きながら聞いている。その  
疎外感を感じていませんよと伝えるために。時折そよ  
風さんはワタシにも話しかける。

「学校慣れた？」

とか、

「国語の港町先生って演歌歌手っぽいよね」  
とか。

その度に友達が隣で一睨みしてくることが苦痛で、  
またそれに気づかないふりをしなければなりません。  
闘じた。

「それでもお前はそみ風さんの友達かよ」  
と言いたいくらいだった。でも言わなかった。

だから、ひどく気疲れた

ワタシはそんなことを思いついたらだけねじ、小道  
の花たちはとてもうれしそうに純粹に全身を雨に預  
けてくれるように見える。

—潤—

両手を広げて花が言っているように思える。気がする  
なって、言っているように思えた。

と、また手紙があった。

雨に濡れないようにと考えてのことだろうか、少しオ  
ブシエの子猫の部分で陰になってるやうに置か  
れている。。昨日とは微妙に違う場所だ。暗い気分の  
中、少しだけ好奇心が沸いた。

昨日より慎重に手に取ってみる。

このはばを あたまたこのすると もとにもどります

きっと小さな子供がいたずらでもしているのだろうと、やっぱり手紙を畳みなおして元の場所に置いた。すると突然の気配。明らかに誰かに見られているような気がして後ろを振り向いた。すさまじい熱視線。でも、誰もいない。右も左も後ろも前もクルクルと回転して確認したけれど、いない。

その時だった。生温かい風が右足の踝辺りにそっと触れた気がした。初めての感触。

まるで存在を示すかのようだった、それは接触してきたのだった。

また翌日。

今日は違う道を通ることにした。二日続けて手紙があったことがストーカーかじみでいて薄気味悪くて、少し遠回りすることにしたのだ。

前に目に留まった雑貨屋がある。その店は朝十時から開店なので、まだ通学時間帯は当然シャッターが閉まったまま。閉まっけていても楽しめるように、シャッ

ターには可愛い動物のイラストが描かれている。ウサギがいて、キリンがいてウもいる。下の方にスカンクがいるなあと目をやるど、そのシャッターの前。見覚えのある紙が落ちていた。

嘘でしょ、と唾を飲み込んで少しむせた。

おそろおそろ聞かしてみろ。

「このはな あげますので、ほくとトモタチ になってくれませか？」

もしかして私めがけて手紙を置いてあるっついでしょかしてではない。誰でもいらんじやなへってまをかとは思ったけれど、ん、ん、ん、そのまうだ。手紙の間からは葉っぱではな、紫色の小さな花がハラハラと落ちた。早速ワタシはスマホで調べてみる。訂ねな草。これは、交換日記を催促しているのか？

その時頭の中に、一生懸命に手紙を書へん小さな子供が思い浮かんだ。いつも楽しんで書いて、いつも喜ばれた。だ、返事が無くて可哀なっつだ。こわまでの対応で、明日は諦めて書へんことを辞めてしまっかもしれない。学校でもひとりぼっちで、本当に友達が欲しいのかもしれない、今のワタシみたいに。そう思った。

ストーカーなのではないかと勘繰って気持ち悪がって通学路を遠回りなどして。とんでもなく思いやりのないことをしてしまったのではないかと、自意識過剰な自分を反省した。

もし、もしも本当にワタシの想像通りだとしたら、サントクローズみたいになってあげたい。

そう考えたワタシは、毎日手紙の交換をするようになった。姿を見たことはないが、きちんと翌日には返事が来ているのだ。

一体どんな子なんだろう。

小さい男の子を想像しながら、なんだかワクワクした。謎めいているが、かわいい秘密の友達ができた気分だった。

そんなある日。

クラスの子がこんな話をしているのが聞こえた。

「さっき先生が言っていたけど、今朝学校の近くでタヌキが車に轢かれたらしいよ。一匹だけで、まだ小さかったって。お母さんとはへれたのかもね。しかも、東京にもいるんだね。タヌキって」

そして不思議とその翌日から、手紙が置かれること

はなくなってしまうた。突然の交換日記の終焉に私はひどく拍子抜けしてしまったが、きつと子供のことだから急に飽きてしまったのだらうと気に留めなかった。

それでも毎日、「恋手紙がないか」とか確認だけはしている。

あの雑誌屋で買ったメモ帳「研」を挟んで。